

特集I 演劇のチカラ

「演劇都市・金沢」の大いなる可能性

かなざわ演劇人協会事務局長
劇団アンゲルス主宰

岡井 直道

私の演劇体験は、今から40年ほど前の大学演劇に始まる。北國新聞社にあったキヤパ5000くらいの北國講堂が安く使え、そこで旧式の照明や音響機器を見よう見まねでつなぎ、なんとか操作することもやらせてもらえた。もっと面白いものを作りたい！という情熱は、その劇場があったからこそ、その中身の充填^{シヨウケン}を望んだ中で持続したのかもしれない。

とにかくこの北國講堂を拠点に1960年代後半の4、5年の間、様々な工夫を重ね、実験的な作品を生み出していった。

その後上京して、専門劇団に入団した。東京での劇場公演に加え全国の劇場、学校の体育館での公演を続けた。労演（市民劇場）、親子劇場、学校公演と1年中全国を旅していた。毎日が肉体を酷使した舞台作りだった。

よくもあれだけの過酷な日々、舞台を維持できたものだと今さらながらに思う。お手軽にはいかない時代、コンビニや100円ショップがない時代。だから何でも自分たちで工夫してあみ出して作らねばならなかった。時間と手間がかかり、寝る時間が削られた。

アンゲルス第1回公演「マクベス」を上演した。9歳から72歳まで40人くらいが集まった。それから毎年、1カ月半ほど金沢に住んで作品をつくってきた。経済的にもギリギリな生活を続けていたわけだが、99（平成11）年に石引にあった喫茶店を引き継ぎ、この時点で金沢に移住した。この店で、ほんのちよっぴりの黒字が出たのは最初だけ



劇団の創立10周年で披露した「マクベス」公演
=2007年3月、金沢市民芸術村



2007いしかわビエンナーレ秋の芸術祭で公演する劇団アンゲルス=金沢市民芸術村

舞台というものの中で実現するものは、なんと不思議なものなのだろう。そこには、それにかかわるものたちの汗と血が埋まっている。そんなふうにかかわること、自分たちが作るものの内に密かな愛情と誇りを生み出していた。そして同時に悔しさと、屈辱も。

金沢に戻って活動

1996（平成8）年、金沢市民芸術村のオープン時に、地元のひとつの劇団が何らかの形で作品を発表し、おおいに盛り上がった。ぼくはその頃、「東京演劇アンサンブル」という劇団に所属していたが、胃がんの手術直後で療養のため金沢の実家に帰ることもしばしばだった。そんな折り、地元の友人から「まだまだ多くの人が演劇をすることを望んでいる。是非、君が演出して作品を創るべきだ」と勧められた。

これがかきつけて週末、東京と金沢を往復して半年、「金沢市民芸術村こけら落とし演劇祭」で、その後2007（同19）年までの7年半赤字続きだった。よく続いたものだとは、ここに通い続けてくれた友人の言だ。周りの飲食店が次々に店を閉めていく中で「アンゲルスCafe」はまだ店を開いている。投資ということが全くなく、もっている資金のみで材料を買い、その範囲で商売をやる。もうけはないが赤字もたいしたことはない。その連続で、なんとか生き延びていた。遊びにいけないから、この店で遊びを楽しむことを作り出した。

20世紀の演劇革命

かつてニューヨークの「ラ・ママ」という劇場で芝居をやったことがある。その主催者のエレン・ステイアートは、黒人のおばちゃん、1960年代、まだ黒人差別が現実の時代に、ブロードウェイに続く道とは違う演劇づくりを始めたらしい。とりあえずCafeで始めた訳だ。公的な劇場ではない場所で演劇をやることで、その場所が

劇場になる。劇場というものが、劇を創り、見るということの場所なのだということがシンプルに示された。

ニューヨークで演劇をやるものは一様にプロードウェイに顔が向いていた頃、ただ演劇がやりたいたと思っただけで、その場所にCafeを選んだ。そのことが20世紀の大きな演劇革命となったのだ。私は合点がいった。見よう見まねで私のCafeで演劇を創り発表してみようと思った。そこで、店を閉めて夜中にけいこを始めた。これがなかなか楽しい。粋な感じがする。今までとは違った芝居創りが面白い。構えず、シャンソン歌手が歌うように芝居がやれたらどんなにカッコいいだろう！ そんなふうにならなかつた。

当初は思いつくまま、俳優たちとCafe内をうごめきながら空間を刻んでいく。そこに集まる客たちと同じ空間を共有する芝居が構想されていく。これは実際スリリングな在りようだった。既成の脚本が解体され、その時その場所に緊張感の持てるものだけが凝縮されていく、そんな感じが

が「ブランドものを世界から買い集めるといったことでは達成できない」というバブル崩壊後の命題に向き合い、その具体的志向と実践の第一歩を踏み出したのだ。そこに住む若者たちの実力を養成し定着しなければ、その地は面白くならないというわけだ。

文化は美しき剥製はくせいではなく、今に生きるフィジカル（身体性）なのでありたい。第2回の今年は劇場内での宿泊を可能にし、他地域と地元のリエーターの混在をさらに進めていくことにした。これらは、地域自らがつくる創造活動の新たな始まりだ。

そして私が住む金沢市の市民芸術村は、24時間使用可能な施設であり地域在住者による企画運営が15年近く続いている。それらの期間を経て、地域演劇に携わるものの中によく、創造の「本物の悩みと苦悩」が垣間見えだしたように思う。地域に、消費的なお楽しみ劇場から創造的な演奏劇場への転換が興りだしたのかもしれない。その兆しのようなものを感じている。

していた。劇団アンゲルスの本公演とは別にこのカフェで年間4、5本の作品が生まれた。ここで他のグループもいくつか作品を作ったし、音楽や踊りも頻繁に奏された。

地域演劇の変化

この地で東京時代とは違うやりかたを続けてきて近年、地域演劇に変化が表れてきていることを知るようになった。東京で行われる演劇が本物だという固定した在り方が、実質的に変わってきているのだ。

私は昨年1月に三重県文化会館主催の演劇シンポジウムに参加して多くの地域在住演劇人に出会い、おおいに元気づけられた。

同時期、彦根で我が友人たちが指定管理者制度を受けて「ひこね市文化プラザ」の企画運営を始めた。8月には私もかわって、我が身で創ることそのことが作品となる「ひこねフィジカルアート2009」を企画・開催した。「地域の活性化」

世界の新しい地域演劇祭

ここ1、2年に私は再び、韓国、ルーマニア、モルドバ、ロシアを訪れた。これらの地で行われる演劇祭は、パリやロンドン、ニューヨークとは違う、いわゆる地域の演劇祭だ。この十数年の間に、旧共産圏の国々や、韓国や中国の演劇事情は大きく変わってきた。21世紀の新しい世界の枠組みの中でそれぞれが独自の価値を見いだす努力をしているのだ。

演劇祭には実に様々な地域から個性的な作品が集まる。自分たちとは違ったものの感触は楽しいものだ。それは、既成化してマンネリ化しそうな生活を揺さぶってくれる。私が訪れた街々では、政治家や企業家たちが、人と街の活性化に演劇（劇場）が果たす役割がいかに大きいかということとを認識し始めていた。

実際、文化予算が大きく増えているようだった。なにが自分たちの経済や生活を豊かにするかにつ

いて敏感なのだ。演劇が盛んな地域では、多くの人々が生き生きしている。それは踊り歌うこと、創り楽しむことが、自由に生きるものたち本来の在り方なのだからだと思う。

私は、そんな在りように思いを馳せながら、この金沢の地に「ドラマアカデミー」の創設を夢見ている。金沢は、都市機能、環境、伝統と、これをとつても随分と恵まれた地だと思う。この地にこそ、日本国内どこにもいまだ実現していない本物の「演劇学校」を作ればいいのだ。金沢美大に「演劇科」が創設されれば、それは、現代史の「快挙」となる。地元の企業が世界レベルの「アクターズスタジオ」を立ち上げれば相当おもしろい。その実践は、間もなくおこるであろう「地域主義実現」の中で、「先駆的文化模範」となるはずだ。

何年か前に京都で「国際演劇シンポジウム」に参加したことがある。その折、アジアで一番規模が大きい「香港アートフェスティバル」の女性プロデューサーが私にこう言った。「金沢！ わたしが日本の中でもっとも興味をかき立てられる

街だ。かなざわ演劇祭の内容を知らせて欲しい」。彼女の仕事の多くは、世界中の劇場や演劇祭を見て回り情報を収集することだった。彼女は、今や世界の多くの街で演劇は個性を失いつつあるとし、「金沢は可能性を秘めた都市だ。是非、具体的な連絡が欲しい」と言った。しかしわたしは、未だ彼女に招待状を出せずにいる。

世界中で、「都市化と均一化の進行」が続いている。だからこそ今、地域に本物を志向し新たな才能を見いだすことが求められている。持てる力を精一杯発揮し、工夫と失敗の連鎖を身一杯に引き受けるそんな「一流の演劇環境」は、この金沢にこそふさわしい。今、新たな誇りを産み出すことが僕たちにとつて切実な問題なのだから。



岡井直道（おかい・なおみち）
1947（昭和22）年金沢市生まれ。71年東京演劇アンサンブル演出部入団。96年、劇団アンゲルスを主宰。かなざわ演劇祭代表。ニューヨーク、ソウル、東欧ルーマニア、モルドバ共和国、リヒウ（ウクライナ共和国）、香川市（韓国）、モスクワ（ロシア）、バカウ（ルーマニア）の国際演劇祭にそれぞれ公演参加している。